

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo. 61（2019 年 4 月号）◆

※お詫び：先日修正前のニュース・レターNo.61 号が誤って送付されたと思いますが、

こちらが正式のニュースレターNo.61 です。不手際をお詫び申し上げます。

新年度が始まって約一ヶ月たち、新年号の切り替えもすぐに迫ってきて、なんとなく慌ただしい連休となりましたが、会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。このたびは、最新号の『Intelligence』19 号が刊行されましたが、お手元に届いておりますでしょうか。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html>

また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。また、20 世紀メディア研究会は 5 月は 11 日、6 月は 29 日に予定されています。こちらにも是非ご参加下さい。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いておりますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第 29 回を重ねており、藤元直樹さん、賀茂道子さんをはじめ、いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第 126 回研究会】（3 月 30 日（土）14 時 30 分～17 時 30 分）

- **角尾宣信（東京大学大学院総合文化研究科博士課程後期）**

「敗戦直後の日本社会における「風刺・諷刺」の隆盛——プランゲ文庫所蔵資料、特に風刺雑誌『VAN』『諷刺文学』『人間喜劇』を中心に」

主に風刺雑誌『VAN』の誌面を計量的に分析することにより、敗戦直後における風刺の性格について検討していただきました。風刺は批判的、攻撃的であるだけでなく、敗戦という絶望的な状況において、「共感」を得る道具としての面があったことが論じられました。会場からも活発に質疑応答がありました。

- **澤田和彦（埼玉大学名誉教授）**

「『日本の白系ロシア人』：ロシアで発見された「極秘」文書から」

元 KGB 職員が所有していた、日本・満洲・朝鮮におけるロシア人の記録について報告いただきました。外交史料館のロシア人関連史料がほとんどない時期の空白を埋めるだけでなく、日本の勢力圏内に居住していたロシア人を通し、ソ連が予想以上に情報網を組織し、日本が諜報において後手に回っていたことを裏付けるものでした。ロシア人研究、ソ連史だけでなく、諜報研究からも非常に重要なご報告でした。

●4月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、4月19-20日（土・日）国際シンポジウム「せめぎ合う帝国主義——1894-1953の北東アジア：コンセプトとアプローチ」、5月11日（土）、6月29日（土）、7月20日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【第127回研究会】国際シンポジウム「せめぎあう帝国主義～1894-1953年の北東アジア：コンセプトとアプローチ」（4月19日（金）・20日（土）9時～17時）

これは英国のクイーンズ大学ベルファスト校と早稲田大学との共同研究プロジェクトの最初の集会で、二日にわたって計21名の研究者が一年間のプロジェクトでの研究原案を報告するものであった。一日目は、パネル1「帝国主義と反帝国主義」では、クリストファー W.A. スピルマン（帝京大学）「日本の大陸膨張の要因としての社会進化論」、アレクサンドル・ティトフ（クイーンズ大学ベルファスト）「帝国か祖国か？ 北東アジアへのロシ

アの関与におけるインペリアルとナショナルの曖昧さ」、ダラ・ギャノン（クイーンズ大学ベルファスト）「東洋と西洋の邂逅：朝鮮とアイルランドにおける革命の結びつき，1919-1923」、パネル2「列強と北東アジアの国境地帯」では、林悦忻（エクセター大学）「『ポイズン・マネー』：戦争と革命における中国のルーブル流通圏」、長與進（早稲田大学）「1920年4月11日にハイラル駅でなにが起こったか」、中山大將（京都大学）「日露/ソ境界地域における境界変動と住民：サハリン/樺太とクリル/千島」、パネル3「報道機関と国家」では、鄭晋錫（韓国外国語大学校）「帝国の支払日：日英関係における朝鮮問題，1905-1910」、谷川舜（早稲田大学）「諸帝国の中における近代日本の植民地言論の誕生，1898-1912」、パネル4「帝国のイメージ」では、ピーター・ロビンソン（日本女子大学）「『タイムズ』紙の日本およびロシア付録におけるエリザベス・キースとウルリック・ファン・デン・ボガードによる図像：芸術による仲介，1914-1917」、ピーター・オコーノ（武蔵野大学）「信頼性と国家の誠実性：北東アジアにおける遅れてきた帝国主義の売込み，1928-1941」が報告し、一日目の最後は、梅森直之（早稲田大学）による基調講演「国民国家と植民国家のはざま：明治日本における警察・監獄制度の創設」で締めくくられた。

また二日目は、パネル5「日英関係をめぐる見解と認識」では、堀田綾子（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）「虚ろな同盟：大英帝国と日本の協力と競争，1902-1923」、齋藤英里（武蔵野大学）「帝国主義を比較する：矢内原忠雄の植民学再考」、土屋礼子（早稲田大学）「アジアにおける日英宣伝のせめぎあい：メディアのナショナリズムと帝国主義のはざま 1926-1945」、パネル6「北東アジアにおける国際地政学」では、シュラトフ・ヤロ斯拉ブ（神戸大学）「『列強』の盛衰：1895-1945年における日本とロシア」、シェルゾッド・ムミノフ（イーストアングリア大学）「ソ連の優位性という神話：東アジアにおける日本人戦略家のソ連勢力への先入観について，1925-1945」、小林聡明（日本大学）「朝鮮戦争への日本の参戦，1950-1953」、パネル7「北東アジアの人々の移動と流転」では、チョウ・ミキ（ケンブリッジ大学）「海を越える朝鮮人：1910-1953年における帝国日本への移動」、飯島真里子（上智大学）「協働する植民地：糖業と移民から見る日本帝国期の太平洋」、小林昭菜（多摩大学）「軍国主義から共産主義へ：日本人捕虜はソ連でどのように変わったか」、そして最後の基調講演では、中心メンバーのアグライア・デ・アンジェリ（クイーンズ大学ベルファスト）が「せめぎ合う帝国主義ネットワーク：アイデアからプロジェクトへ」を講演した。

●5月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、5月11日(土)、6月29日(土)、7月20日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム】 梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編『満洲の戦後——継承・再生・新生の地域史（アジア遊学 225号）』（勉誠出版、2018年）をめぐって

戦後70年を経て、引揚者・留用者など関係者の多くが亡くなり、「満洲」の記憶は次第に忘れられようとしている。近年のアフガニスタン、イラク、シリア、クリミヤ半島などで起きている紛争は、いまなお民族と国家、支配と被支配という問題が、人類にとって解決され得ない問題であることを示唆している。それゆえ、日本が異なる民族、異なる価値観・慣習を持つ人々を支配した「満洲」は、その象徴的な存在として今なお問い直す価値があるのではないだろうか。

以上のような問題意識から、昨年11月、私が編者となりアジア遊学 225号『満洲の戦後——継承・再生・新生の地域史』が出版された。その後、「戦後「満洲」史研究会」で書評会が行われ、2月の「満洲の記憶研究会」では私と大野氏が本書の意義や課題について報告した。意義について一言で言えば、日本人の視点から語られることの多かった「満洲」・東北地域を現地の人間や地域の視点から考察し、「満洲国」の崩壊で断絶するのではなく、「戦後」に焦点を当てたことにあるだろう。

20世紀メディア研究所との関連で言えば、南龍瑞・郭鴻「満映から「東影」へ——政治優先時代のプロパガンダ映画」や拙稿「『東北画報』からみた戦後東北地域」がメディア史研究の成果として収録されている。「満洲国」から戦後への継承という点では、満洲映画協会は格好の材料であるし、「満洲国」崩壊後の写真史料の発掘という点で、中国共産党が発行した『東北画報』は参照されるべき価値があると思う。日清戦争以後、日本が進出し、やがて実質的に支配することになった「満洲」において、その支配がメディアにおいていかなる爪痕を残したのか、その検討も残された課題ではないだろうか。

[4月1日付 文責：梅村卓]